

『栄花物語抄』 翻刻と注釈（1）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2020-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 成里 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21250

『栄花物語抄』翻刻と注釈（1）

中村 成里

《凡例》

- 一、本稿は宮内庁書陵部所蔵『栄花物語抄』（函号五〇二一七八）の翻刻及び注釈を試みたものである。
- 二、全体を、【翻刻】【校訂本文】【語釈】【補説】【参考文献】の順に立項した。
- 三、【翻刻】は原文の形態をできるだけ尊重している。基本的に当該本において示された項目「一、く」の区切りをひとまとまりとして本文を掲出し、【校訂本文】以下に、注釈項目を記した。
- 四、【校訂本文】については、通意の便宜のため以下の処理を行った。
 - ① 底本の本文を最大限尊重しつつも、適宜漢字を当て、仮名遣いを歴史的仮名遣いに統一した。その場合は、底本の表記をルビに残すことで、底本の表記を復元できるようにした。
 - ② 異体字は通行の字体に改めたが、ルビに示さなかった。
 - ③ 本文には適宜、濁点や句読点を附した。
 - ④ 送り仮名など、底本にない文字を補った場合は、傍点「・」で示した。

五、「語釈」は簡潔を旨とし、注釈が考証的かつ長文を要する場合は、「補説」で説明した。

六、「栄花物語全注釈」は「全注釈」、新日本古典文学全集「栄花物語」は「新全集」と略号を用いた。丸数字は巻数を示す。なお、引用の和歌は特にことわりがない限り、「新編国歌大観」による。

《書誌及び解題》

書誌は次の通りである。

縦27・5糎、横21・0糎、袋綴、一冊、楮紙、題簽中央、外題「栄花物語抄」、墨付66丁、12行書き、蔵書印「宮内省／圖書印」、「明暦」、奥書「寛正壬午二月日 □□□四十五歳」※□□□は「熙然」と読めるか。

当該本は松村博司氏に「寛正注」と紹介され（以下、「寛正注」と略称する）、御所本に属する。これまで特に考察の対象とされずに現在に至る。「栄花物語」は、近世期の国学者による注釈書や校本が散見され活字化されてもいるが、現時点において室町期における『栄花物語』の注釈書の全容は詳らかではない。

奥書によると「寛正注」は寛正三年（一四六二）二月に書写されており、書写者については不詳である。また、末尾に蔵書印「明暦」が捺されていることよって、後西天皇旧蔵書とわかる。「明暦」印については平林盛得氏「後西天皇取書の周辺」『近代文書学への展開』（岩倉規夫氏・大久保利謙氏編、柏書房、一九八二年）などに詳しい。後西天皇（一六三七～一六八五）は父後水尾天皇、母は贈左大臣櫛笥隆致の女隆子（逢春門院）。和歌や連歌に通曉し古典籍への造詣が深く、蔵書の書写活動が著名である。

「寛正注」には副本とみられる同一の書名を有するものがあり（資料番号五〇二一八二）、こちらは題簽が靈元天皇

宸筆という。

このほか室町期の『栄花物語』注釈書には、松村氏が「長禄注」と紹介した『栄花物語抄』（資料番号五〇二―七九）がある。これも題簽は靈元天皇宸筆とされる。冒頭に「栄花物語 飛鳥ヨリ借申 長禄」とあることから、長禄年間（一四五七―一四六〇）の書写にかかるようだ。

さて、「寛正注」に話を戻すと、その内容は『栄花物語』巻一から巻一〇までの本文を抜粋して注を加えたものである。

当該本に記載されている巻名は、次の通りである。

栄花物語第一月の宴

栄花二 花山たつぬる中納言

栄花三 さまくのよろこひ

第四 みはてぬ夢

第五 うらくのわかれ

第六 か、やく藤つほ

栄花第七 とりへ野

第八 はつ花

第九 いはかけ午三三二

第十 ひかけのかつら

第九は一条法皇が寛弘八年(一〇一一)六月二日の午の刻に三十二歳で崩御したことを示すか。卷名は梅沢本と一致しており、梅沢本と同類の本を参看したと推される。また、引用の本文は所々省略されている。

注は概ね簡略であるが、適宜系図が挿入されている。「寛正注」は字句の解釈にとどまらず、系譜を理解するための書でもあったと思しい。なお、系図の罫線は朱書きされている。

近年室町期の古典学については『伊勢物語』『源氏物語』が盛んに研究されてきた。当該本はこれまで顧みられなかった、学問としての『栄花物語』のありよう、その享受の様相を示す上で貴重であり、今後も考究を要する。

【参考文献】

- ・宮内庁書陵部編『和漢圖書分類目録』宮内庁書陵部、一九五三年。
- ・松村博司氏『栄花物語の研究』刀江書院、一九五六年。「長祿注」に関する記載がある。

〔附記〕翻刻と写真掲載を許可して下さった宮内庁書陵部に深謝申し上げます。

【翻刻】

栄花物語第一月の宴

寛正三年二月廿一
細典道賢本借用

世はしまりて後此国のみかと六十餘代にならせ給に

けれど此次第かき盡すへきにあらす——宇多のみ

かと、申——みこたちあまたをはしましける中に

一のみこ敦仁親王位につかせ給けるこそは醍醐の聖
帝とまして——卅三年をたもたせ給——おほく

の女御達さふらひ給ければおとこみこ十六人をんな
みこあまたをはしましけり

右第一巻取初詞也

朱雀 寛明 延喜第十一御子
村上 成明 同第十六御子

御母穩子即皇后女

【校訂本文】

栄花物語第一月の宴

寛正三年二十一日
細典道賢本借用

世はじまりて後、この国のみかど六十余代にならせ給ふにけれど、この次第書きつくすべきにあらず。——宇多のみかどと申す——御子たちあまたおはしましける中に、一の御子敦仁親王位につかせ給ひけるこそは、醍醐の聖帝と申して——三三年をたもたせ給——おほくの女御達さふらび給ひければ、男御子十六人、女御子あまたおはしましけり。

右第一巻最初詞也

朱雀 寛明 延喜第十一御子
村上 成明 同第十六御子

御母穩子即皇后女

【語釈】

○寛正三年二十一日 寛正三年（一四六二）壬午、二月二十一日。在位の天皇は後花園天皇。室町幕府の將軍は足利義政。細川道賢から借用した年月日を記したか。

○細典道賢 応永一〇年（一四〇三）〜応仁二年（一四六八）没。摂津中島（大阪府）の分郡守護にして右馬頭を官途とした細川典厩家の初代、細川持賢。室町幕府管領細川満元の三男。法名は道賢で通称は弥九郎。応仁の

乱では東軍に付いている。摂津崇禪寺を創建した。『堯孝法印集』によれば、道賢は文安三年(一四四六)一月二四日、三月八日に自邸で歌会を催している。また、歌僧正広の『松下集』五九三番歌詞書によると、嘉吉元年(一四四一)六月に障子絵十二月詩歌の五月を詠じたという。正徹の『草根集』においても和歌を良くしたと知られる。当該本は道賢所持本の写しとする。

○御子たちあまたおはしましける 主語は宇多天皇。『本朝皇胤招運録』には二人の皇子女が認められる。

○一の御子敦仁親王 のちの醍醐天皇をさす。宇多天皇の第一皇子。母は藤原高藤女胤子。仁和元年(八八五)〜延長八年(九三〇)。諱は維城、のち敦仁と称した。その治世は村上天皇とともに「延喜天曆の治」と評される。法名は金剛宝、陵は後山科陵である。

○三三年をたもたせ給 醍醐天皇(敦仁親王)の治世は寛平九年(八九七)〜延長八年(九三〇)の三三年。直後に中略の記号が入るが文の途中である。

○おほくの女御達さぶらひ給ひければ 醍醐天皇には二人の後妃が確認される(『二代要記』)。

○男御子十六人、女御子あまたおはしましけり 親王二六人、内親王二六人、賜姓源氏六人、童子一人が『本朝皇胤紹運録』に見られる。

○御母穩子 仁和元年(八八五)〜天曆八年(九五四)。父は藤原基経、母は人康親王女。保明親王(文献彦太子)、朱雀天皇、村上天皇の母。延長元年(九二三)に立后、中宮となる。朱雀天皇の即位にともない承平元年(九三一)に皇太后、天慶九年(九四六)村上天皇即位の際に太皇太后となった。『太后御記』を記している。

【補説】

『栄花物語』巻一の冒頭部分である。「六十余代」とあるが、醍醐天皇は六〇代、朱雀天皇は六一代、村上天皇は六二代となる。巻一冒頭の現在は、村上天皇の時代を想定しているとみられる。この箇所は、宇多天皇から起筆し、醍醐天皇の御代について述べる。注は朱雀天皇と村上天皇の名を挙げ、母は藤原穩子と示す。

【参考文献】

・川口成人氏「細川持賢と室町幕府——幕府——地域権力間交渉と在京活動の検討から」『ヒストリア』大阪歴史学会、二〇一八年二月

【翻刻】

- 一 御物忌などにてつれ／＼におほしめさる、日などは」一丁ウ
御まへにめし出でてこすく六うたせへんをつかせいし
なとりをせさせて御覽し

右詞村上帝女御達をまへにて遊給はせ事也」二丁オ

【校訂本文】

- 一 御物忌などにて、つれづれにおほしめさる日などは、御前に召し出でて、碁、双六うたせ、へんをつかせ、いしなとりをせさせて御覽し

右詞村上帝女御達を前まへにて遊び給はせる事也

【語釈】

○御物忌 主語は村上天皇である。村上天皇の御物忌などの際には、后妃達を御前にて遊ばせ、天皇はそれを眺めて楽しんでいたという。

○いしなとり 「いしなご」と同じという。古くから女兒の間に行なわれていた遊戯の一種。「日本国語大辞典第二版」に「いくつかの小石をまき、その中の一つを投げ上げて落ちないうちに、まいた石とともに取り、早く拾いつくしたものを勝ちとするもの。現在のお手玉に似た遊び」と説明されている。

【補説】

村上天皇の御代の記事である。村上天皇が「堯の子の堯ならむやうに」と評された記事でもあるが、掲出場面は女御達を伺候させ、天皇の面前でそれぞれに碁や双六を打たせたり、へんをつかせ、いしなとりをさせるなどして楽しんでいゝさまを描く。天皇による円滑な後宮運営の有り様が示されている。注は概略に言及する程度のもの。

【系図について】二丁裏〜五丁表

二丁裏から五丁表まで二つの系図が収載されている。

一つ目は冬嗣を始祖とし、忠平の子孫を中心に四丁表まで記されているが、兼家の子孫は「此末流多 注別」とあり、除外されている。

二つ目は先に述べたように兼家の子孫を別に分けて書かれたものであるが、道長の子孫に関する記載は無い。巻四に道長及びその子女の系図が収載されているので、ここははじめから道長以外の子孫の記載を目的としたのだろう。系図を概観すると、『栄花物語』の内容を反映した勤物が記入されている。

以下、縮小した写真を掲載する。

【翻刻】

一 廣幡のみやす所そあやしう心ことに心はせある様に

みかともおほしめいたりける内よりかくなん

あふ坂もはてはゆき、のせきもゐす尋てとひこきはかへさし

といふ哥をおなじやうにかゝせ給て御かたゝにたてまつら

せ給に此御かへり事をかたゝさまに申させ給けるにひろ

はたのみやす所はたき物をそまいらせ給たりけるされは

こそ猶心ことにみゆれとおほしめしけり

右哥は折句の杳冠あはせたき物すこしと村上みかと

あそはして方々へまいらせられたるに此ひろはたの

女御計心えて薫をえりけるなり此女御はひろ

はたの中納言庶明御女也計子と申」五丁ウ

【校訂本文】

一 廣幡の御息所ぞ、あやしう心ことに心はせある様に、みかども思しめいたりける。内よりかくなん、

あふ坂もはてはゆききの関もゐす尋ねてとひこきはかへさじ

といふ歌をおなじやうに書かせ給ひて、御方々にたてまつらせ給ふに、この御返事を、方々さまに申させ給ひけるに、広幡の御息所は、薫き物をぞまゐらせ給ひたりける。さればこそ、なほ、心ことに見ゆれと思しめしけり。

右歌は、折句の杳冠「あはせ薫き物すこし」と村上みかどあそびして、方々へまゐらせられたるに、この広幡の女御ばかり、心えて薫を選びけるなり。この女御は広幡の中納言庶明女なり。計子と申す。

【語釈】

○広幡の御息所 源計子。生没年不詳。村上天皇の更衣。父は源庶明、村上天皇との間に理子内親王、盛子内親王を生み、広幡御息所と称された。村上天皇に進言して、梨壺の五人が『万葉集』訓点を施させたという。勅撰歌人。

○「あふ坂も」の歌 杳冠折句の和歌。それぞれの句頭、句の末の文字を合わせると、「あ」「は」「せ」「た」「き」「も」「の」「す」「こ」「し」となる。歌意は「恋しい人に逢えるという逢坂の関も、その端には往来をとがめる関守もいません。どうか私を尋ねて来て下さい。来てくれたら決して帰しませんよ」。

○御方々にたてまつらせ給ふに 村上天皇は、后妃達にこの歌を贈らせなされた、の意。天皇は后妃達に杳冠折句が理解できたかどうかを試したのである。

○方々さまに申させ給ひけるに 諸本「様／＼に」だが学習院本はおどり字が補入されている。皇妃達がそれぞれ村上天皇に返事を申し上げなされた時に、の意。

○心ことに見ゆれと思しめしけり 村上天皇は計子の機転と理解力に感心して、心ばえが特別だとお思いになられたという。

○広幡の女御 正しくは更衣である。

【補説】①和歌の他出

「あふ坂も」の歌の他出を次に掲出する。作者を光孝天皇詠とするものと村上天皇詠とするものに分かれる。

『新撰和歌髓脳』は光孝天皇詠、『村上天皇御集』が村上天皇詠とする。『栄花物語』は『村上天皇御集』八三番歌左注に同じく広幡御息所の教養の高さに言及していることから、『村上天皇御集』もしくはそれに類するものを参照したか。光孝天皇詠も存するいっぽうで、『栄花物語』が村上天皇の事跡として位置づけていることに注意したい。

以下、他出歌となる。

・あふさかもはてはゆききのせきもゐずたづねてとひこきなばかへさじ (新撰和歌髓脳・一三・光孝天皇)

天曆四年三月十四日、藤壺にわたらせたまひて花を御覧じて

・あふさかもはてはゆききの関もゐずたづねてとひこきなばかへさじ

此歌をよろづの女御たちにつかはしたりければおもひおもひに御返しをみな申したるに、広幡の宮す所はたき物をひきつつみてまゐらせて御返りはなくて有りければ、猶人よりは心ばせある人になんおほしめしける

(村上天皇御集・八三)

・あふさかもはてはゆききのせきもゐずたづねてこばこきなばかへさじ (俊頼髓脳・一二・光孝天皇)

・あふさかもはてはゆききの関もゐずたづねてとひこきなばかへさじ (輿義抄・二八・光孝天皇)

・あふさかもはてはゆききのせきもゐずたづねてこえこきなばかへさじ (和歌童蒙抄・八五八・光孝天皇)

・あふさかもはてはゆききのせきもゐずたづねてとひこきなばかへさじ (和歌色葉・上・二二・村上天皇)

・あふさかもはては行来のせきもゐずたづねてこえこきなばかへさじ (八雲御抄・折句杓冠・二七・読人不知)

・あふさかもはてはゆききのせきもぬずたづねてとひこきなばかへさじ

（十訓抄・一二三・村上天皇）

・あふ坂もはてはゆききのせきもぬずたづねてとひこきなばかへさじ

（和歌肝要・七・読人不知）

・あふさかもはてはゆききのせきもぬずたづねてとひこきみはかへさじ

（悦目抄・五八・光孝天皇）

・逢坂もはては往來の関もぬず尋ねて問ひこ来なばかへさじ

（正徹物語・九四・村上天皇）

【補説】②『栄花物語』諸本の問題

梅沢本や西本願寺本、富岡本には、次の後日談が記述されている。引用の本文は新全集による。

いとさこそなくとも、いづれの御方とかや、いみじくしたてて参りたまへりけるはしも、勿來の関もあらまほしくぞ思されける。御おぼえも日ごろに劣りにけりとぞ聞こえは[□]べりし。

①二八～二九頁

※□は執筆者が私に記した。

杵冠折句に気づかず和歌を額面通りに受け取った愚かな后妃が村上天皇のもとに参上して、帝寵を失ったという。学習院本にはこの部分はない。

「寛正注」の筆者は、この部分を掲載せず、広幡御息所の機転と村上天皇の評価の部分にのみ言及する。「寛正注」掲載の『栄花物語』本文は巻名を見ると梅沢本や西本願寺本に親近しているので、意図的に記載しなかったのだろう。

また、右に挙げた箇所には新全集頭注でも指摘されている通り、「はべり」が用いられている。正編の「はべり」

の例は梅沢本の場合、一二箇所に限定されるなど用法が限定される。新全集は「ここは、聞書であることを読者に明示しようとしたと考えられるが、聞書である原資料の表現をそのまま取用したのかもしれない(①二八―二九頁)」と論じている。

梅沢本、西本願寺本、富岡本などの普通本系の諸本は広幡御息所の聡明さと対照的な后妃を描き、その能力を明確に評価するために聞書を装って増補した可能性があるだろうか。

(なかむら・なり 商学部専任講師)